写真に取り組み始める。代表作のひとつである、夜の戸外を暗室として使用する作品は、大判の印画紙を川に沈め、月と懐中電灯を使って露光をおこなう。これらのイメージは一見抽象的であるが、非常に描写力があり、自然の威力を感じさせる。

—

《ハーフ・ムーン - ブロッサム - ブルー》
2003年
銀色素漂白方式印画
1295 × 600
日動コンテンポラリーアート

24
ジェームズ・ウェリング
James Welling | 1951–
アメリカ生まれ。1971年、カリフォルニア芸術大学で映画とビデオを専攻し、ジョン・バルデッサリに師事する。写真は独学。テーマが多岐にわたる個別のシリーズを手掛け、ポラロイド、ゼラチン・シルバー・プリント、フォトグラム、デジタルプリントなど、さまざまな写真媒体により実験的な作品制作をおこなう。

—

《#20》
〈新抽象主義〉より
1998年
ゼラチン・シルバー・プリント
555 × 436

—

《#21》
〈新抽象主義〉より
1998年
ゼラチン・シルバー・プリント
555 × 427

—

《湿地の草、オールドセイブルック、コネチカット》
〈新風景〉より
2001年
ゼラチン・シルバー・プリント
194 × 245

—

《タイル フォトグラフ 8》
1985年
ゼラチン・シルバー・プリント
495 × 392

—

《糸巻き》
〈カレーのレース工場〉より
1993年
ゼラチン・シルバー・プリント
250 × 220

25
ハリー・キャラハン
Harry Callahan | 1912–99
アメリカ生まれ。1946年、ラースロー・モホイ=ナジと出会い、シカゴのデザイン研究所（後のイリノイ工科大学）に教授として招かれる。1961年、ロード・アイランド・スクール・オブ・デザインに写真学科を設立。妻のエレノアや娘のバーバラなど身近な存在や、日常の平凡な事物を遠景、近景、モノクロ、カラー、多重露光、長時間露光、ハイコントラストなどの多様な手法によって撮影し、作品制作をおこなう。

—

〈エレノア〉より
1951年
ゼラチン・シルバー・プリント
146 × 252

—

《多重露光による木、シカゴ》
1956年
ゼラチン・シルバー・プリント
247 × 277

—

《デトロイト》
1943年
ゼラチン・シルバー・プリント
224 × 353

26
エメット・ゴーウィン
Emmet Gowin | 1941–
アメリカ生まれ。ロード・アイランド・スクール・オブ・デザインでハリー・キャラハンに師事する。1964年に結婚した妻のエディス・モリスはゴーウィンの作品に被写体として繰り返し登場する。1980年にはセント・ヘレンズ山の噴火を機に、空撮を開始。対象への思いやりある眼差しと造形的な美との組み合わせが独自の世界を表出する。

—

《イーディス、チンコーティーグ、バージニア州》
1967年
ゼラチン・シルバー・プリント
165 × 201

—

《イーディス》
1985–86年
ゼラチン・シルバー・プリント
173 × 201

27
ヨゼフ・スデック
Josef Sudek | 1896–1976
ボヘミア（現チェコ共和国）生まれ。製本職人の見習いをしていたが、第一次世界大戦の兵役中に右腕を失う。コマーシャル写真やポートレイト、スティル・ライフ（静物写真）を手掛けるほか、プラハの街並み、窓辺の風景などを静的かつ優しい視線で撮影。チェコ写真界の指導的立場を担う。世界的に評価されるまでに約25年の歳月を要した。

—

《パン、卵、グラス》
1950–54年
ゼラチン・シルバー・プリント
154 × 116

—

《（グラスのある静物）》
1963–72年
ゼラチン・シルバー・プリント
277 × 218

—

〈スタジオの窓辺〉より
1950–65年
ゼラチン・シルバー・プリント
159 × 115

—

〈スタジオの窓辺〉より
1950–65年
ゼラチン・シルバー・プリント
159 × 84

—

〈スタジオの窓辺〉より
1950–65年
ゼラチン・シルバー・プリント
55 × 142

—

〈スタジオの窓辺〉より
1950–65年
ゼラチン・シルバー・プリント
111 × 155

—

《胸のヌード》
1951–54年
ゼラチン・シルバー・プリント
109 × 160

28
W.ユージン・スミス
W. Eugene Smith | 1918–78
アメリカ生まれ。1939年からグラフ雑誌『LIFE』と関わり、第二次世界大戦中は従軍記者として取材。沖縄戦では手榴弾によって顔と手に重傷を負う。復帰後、カメラを持つのがやっとの状態であったが、希望や幸福の象徴となるような、社会性のあるイメージをつくりたいという気持ちを強く持つようになった。フォト・エッセイを究極の形式にまで発展させた人物として知られ、プリント制作においても自身の美意識に裏づけされた厳格なコントロールをおこない、フォトジャーナリズムの分野で際立った独創性を発揮した。

—

《田村町自動車のラッシュ（夜景）》
〈日本…イメージの一章〉より
1961–62年
ゼラチン・シルバー・プリント
158 × 369

—

《食堂》
〈日本…イメージの一章〉より
1961–62年
ゼラチン・シルバー・プリント
183 × 318

—

〈日本…イメージの一章〉より
1961–62年
ゼラチン・シルバー・プリント
311 × 205

—

〈日本…イメージの一章〉より
1961–62年
ゼラチン・シルバー・プリント
288 × 193

—

〈日本…イメージの一章〉より
1961–62年
ゼラチン・シルバー・プリント
210 × 195

—

〈初期作品〉より
1939–42年
ゼラチン・シルバー・プリント
334 × 260

—

《港湾労働者》
〈日本…イメージの一章〉より
1962年
ゼラチン・シルバー・プリント
190 × 284

—

《楽園への歩み》
〈ファミリー・アンド・フレンズ〉より
1946年
ゼラチン・シルバー・プリント
310 × 260

—

《朝日の中を歩く一家》
〈移民労働者〉より
1953年
ゼラチン・シルバー・プリント
260 × 338

29
アンドレ・ケルテス
André Kertész | 1894–1985
ハンガリー生まれ。ストリート・スナップショットの先駆として、アンリ・カルティエ=ブレッソン、ロバート・キャパらの写真家に影響を与える。ハンガリー、パリを経て、1936年以降はアメリカで活動。有名ファッション誌を中心に作品を発表するほか、自身のために撮影した進取の気性と繊細な感性による作品が高く評価される。

—

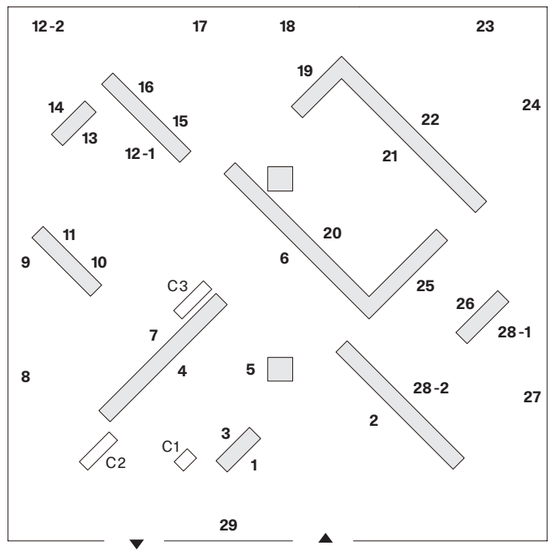
《ノートル・ダム》
1925年
ゼラチン・シルバー・プリント
70 × 83

—

《水面下を泳ぐ人、エステルゴム、ハンガリー》
1917年8月31日
ゼラチン・シルバー・プリント
176 × 242

光のメディア
TOPコレクション
Light as Medium: The TOP Collection

作品リスト
—
［凡例］
作家名
作品名
シリーズ名
制作年
技法
イメージサイズ（縦×横mm）
所蔵
—
所蔵記載のないものは
すべて東京都写真美術館蔵。



1
アルフレッド・スティーグリッツ
Alfred Stieglitz | 1864–1946
アメリカ生まれ。近代写真の父と呼ばれる。芸術としての写真を普及させるため、写真家のグループ「フォト・セセッション」を起ち上げ、機関誌『カメラ・ワーク』を発行。ニューヨークに「291」ギャラリーを開き、写真作品やヨーロッパの先進的なアート作品を初めてアメリカで紹介し、モダニズムを推進した。妻のジョージア・オキーフを20年間撮影するほか、写真の暗喩的表現を極めた〈イクィヴァレント〉（等価物）シリーズを制作。多岐にわたる先駆的活動は、次世代のアーティストに大きな影響を与えた。

—

《イクィヴァレント》
〈20 No.9〉より
1929年
ゼラチン・シルバー・プリント
118 × 91

2
バーバラ・モーガン
Barbara Morgan | 1900–92
アメリカ生まれ。UCLAで画家としての訓練を受ける。1930年、ニューヨークに移住後、写真家に転向。実験的な写真制作によりダンサーのマーサ・グラハムとそのカンパニーをスタジオ撮影するほか、ライト・ドローイングやフォトモンタージュにも取り組む。マイナー・ホワイト、アンセル・アダムス、ドロシア・ラング、ボーモント＆ナンシー・ニューホール夫妻らとともに雑誌『Aperture』を創刊し、重要な役割を果たす。

—

《ピュアなエネルギーと神経過敏な人》
1941年
ゼラチン・シルバー・プリント
493 × 395

—

《マーサ・グラハム、世界への手紙、キック》
1940年
ゼラチン・シルバー・プリント
443 × 573

—

《マディソン・スクエアの春》
1938年
ゼラチン・シルバー・プリント
355 × 435

—

《ホセ・リモン、カウボーイの歌》
1944年
ゼラチン・シルバー・プリント
403 × 343
星野崇氏蔵

—

《形成途上の化石》
1965年
ゼラチン・シルバー・プリント
345 × 455
星野崇氏蔵

3
ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット
William Henry Fox Talbot | 1800–77
イギリス生まれ。科学者、数学者、写真発明家の一人。複数のプリントを可能にするネガ・ポジ法のプロセスを発明し、画像制作に革命をもたらす。フランスのルイ・ジャック・マンデ・ダゲールがダゲレオタイプを発表した1839年に、タルボットは「フォトジェニック・ドローイング」を公表。1844年から46年にかけて、写真を使った最初の商業出版物『The Pencil of Nature』を刊行。6回に分けて発行されたこの本には、タルボットの自宅があったレイコック・アビーの風景や、パリの大通り、陶器、彫像、植物、建築物、静物画など24枚のカロタイプ・プリントとその解説文が掲載されている。

—

《植物の葉》
『自然の鉛筆』より
1844年（プリント年、1989年）
カロタイプ
220 × 200

4
マイナー・ホワイト
Minor White | 1908–76
アメリカ生まれ。アルフレッド・スティーグリッツとの関係によりストレート写真の表現の可能性に目覚めてから、1946年にはサンフランシスコに移住し、アンセル・アダムスと密接な関係を築く。アダムスが提唱したゾーン・システムに影響を受け、ホワイト自身もその普及に努めた。禅宗や易経、グルジェフの思想にのめり込み、自己の内面や精神世界に傾倒する。1952年には、アダムス、ドロシア・ラング、バーバラ・モーガン、ボーモント＆ナンシー・ニューホール夫妻らによって創刊された写真雑誌『Aperture』で、中心人物として23年間編集に携わる。シリアスな写真を志向する者たちの間でカリスマ的存在となる。

—

《太平洋上の太陽、デビルズ・スライド》
1947年
ゼラチン・シルバー・プリント
188 × 251

—

《足のヌード、サンフランシスコ》
1947年
ゼラチン・シルバー・プリント
214 × 270

—

《鳥もちと寄せる波、ポイント・ロボス、カリフォルニア州》
1951年
ゼラチン・シルバー・プリント
232 × 275

—

《納屋2棟、ニューヨーク州ダンスヴィル》
1955年
ゼラチン・シルバー・プリント
238 × 347

—

《窓枠の白昼夢、ロチェスター、ニューヨーク州》
1958年
ゼラチン・シルバー・プリント
296 × 230

—

《儀式の石、ノートム、ユタ州》
1963年
ゼラチン・シルバー・プリント
295 × 228

5
ポール・ストランド
Paul Strand | 1890–1976
アメリカ生まれ。アルフレッド・スティーグリッツと並び、アメリカ近代写真に関わった重要な人物。1915年初頭、スティーグリッツにソフト・フォーカスの写真を批判されたことを契機に、シャープな輪郭へとスタイルを大きく変え、都市の動き、抽象画、ストリートでのポートレイトを撮り続けた。1920年には、チャールズ・シーラーとの共同により、短編映画『Manhatta』を制作する。

—

《ブラインド・ウーマン》
〈『カメラ・ワーク』第49巻／第50巻
1917年6月号〉より
1916年
フォトグラビア印刷
222 × 162

6
アンセル・アダムス
Ansel Adams | 1902–84
アメリカ生まれ。アメリカを代表する風景写真家、教育者、環境保護活動家。独学でピアノを覚え本業にするが、写真を撮るために音楽の道を諦める。イモジン・カニンガムやエドワード・ウェストンら、カリフォルニアの8人の若手写真家たちと「f/64」グループを結成し、写真の特性を追究する。また、フィルムやプリント制作のために、露出と現像をコントロールし数値化した理論「ゾーン・システム」を誕生させた。

—

《月の出、ヘルナンデス、ニューメキシコ》
1941年
ゼラチン・シルバー・プリント
378 × 493

—

C1–3

—

『アパチャー』（編集：マイナー・ホワイト）
- 「エドムンド・テスケによる写真のシークエンス」（1965年夏号）より
- 1952年創刊号（表紙写真：ドロシア・ラング）
- 1958年夏号（表紙写真：ハリー・キャラハン）
- 1962年春号（表紙写真：ローラ・ギルピン）
- 1964年春号（表紙写真：バーバラ・モーガン）
- 1968年夏号（表紙写真：ハイン・グレイブンホースト）
- 1972年秋号（表紙写真：ニコラス・キャロウェイ）

—

ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット
『自然の鉛筆』（1844年、ロングマン、ブラウン、グリーン＆ロングマンズ）

《冬の日の出、シエラ・ネバダ山脈、
ローンパインから望む、カリフォルニア州》
1944年
ゼラチン・シルバー・プリント
380 × 492
—
《凍りついた湖と崖、セコイア国立公園》
1932年
ゼラチン・シルバー・プリント
364 × 472
—
《ジャイアント・セコイアの根、
ヨセミテ国立公園、カリフォルニア州》
1950年頃
ゼラチン・シルバー・プリント
492 × 386
—
《エル・キャピタン滝、ヨセミテ渓谷、
カリフォルニア州》
1940年頃
ゼラチン・シルバー・プリント
270 × 507
—
《サイプレスと霧、ペブルビーチ、
カリフォルニア州》
1967年
ゼラチン・シルバー・プリント
246 × 505

7
エドムンド・テスケ
Edmund Teske | 1911–96
アメリカ生まれ。ソラリゼーションやトーニングなど、暗室での高度で実験的な試みにより、革新的かつ叙情的、強烈なヴィジョンを創造する。主に、シカゴとロサンゼルスで活動した。インド哲学に深い関心を寄せ、複数のイメージを融合させた暗喩的な作品を生み出す。
—
《ニューヨークのブルックリン・ブリッジと
ビル・アラード》
1978年
ゼラチン・シルバー・プリント
322 × 235
星野崇氏蔵
—
《トゥインカ、ロサンゼルス》
1976年
ゼラチン・シルバー・プリント
345 × 265
星野崇氏蔵
—
《フランクリン・モントローズ夫妻の3人
の子ども（1890年代頃）、モノ湖との合成》
1976年
ゼラチン・シルバー・プリント
335 × 232
星野崇氏蔵
—
《ジェーン・ローレンス・スミス、
カリフォルニア、サンタモニカ》
1944年頃
ゼラチン・シルバー・プリント
212 ×168
星野崇氏蔵

8
糸井潤
Jun Itoi | 1971–
栃木県生まれ。高校卒業後渡米。18歳で、生まれ育った日本を離れて、人生の4分の1を異国で過ごした経験が、創作の大きな土台となる。作品群のひとつに、森の中にある光を生と死の間にある「境界線」のメタファーとして捉えようとしたものがある。森の中で多くの時間を過ごした経験から、アニミズムや、東西を問わない人々の祈りの「場」というものに興味を持ち、制作のインスピレーションとなっている。2017年より群馬県中之条町に移り住み、木こり／アーボリストとして林業に従事し、作家活動も続ける。
—
《057_Iwakami_Yamazumi》
〈トポロジー〉より
2015年
インクジェット・プリント
550 × 685
作家蔵
—
《041_Shinmeigu》
〈トポロジー〉より
2015年
インクジェット・プリント
550 × 685
作家蔵
—
《024_Washi》
〈トポロジー〉より
2014年
インクジェット・プリント
550 × 685
作家蔵

9
アルヴィン・ラングドン・コバーン
Alvin Langdon Coburn
1882–1966
アメリカ生まれのイギリス人写真家。エドワード・スタイケンとの出会いからピクトリアリズムを標榜し、「フォト・セセッション」のメンバーとなる。著名人のポートレイトを撮った『Men of Mark』『More Men of Mark』を出版。ヴォーティシズムに参加し、万華鏡のような装置により撮影した〈ヴォートグラフ〉を制作する。1920年代にはイギリスに移住し、神秘主義に傾倒する。
—
《オクトパス》
1912年
ゼラチン・シルバー・プリント
284 × 213

10
ポール・カポニグロ
Paul Caponigro | 1932–
アメリカ生まれ。13歳で写真に興味を持ち始めたが、同時にピアノを弾くことに強い関心を持つ。1953年、朝鮮戦争中に徴兵され、サンフランシスコに送られた際に写真家のベンジャミン・チンを通して、アンセル・アダムスやマイナー・ホワイトと出会う。ホワイトに師事し、ゾーン・システムに基づいた階調豊かなプリントを習得し、風景や生物、自然が創造する「かたち」などを被写体とする。
—
《走る白い鹿》
1967年
ゼラチン・シルバー・プリント
186 × 489

11
ウォルター・チャペル
Walter Chappell | 1925–2000
アメリカ生まれ。風景や自然が織りなすかたち、人体などをモチーフに、神秘的な写真を制作する。ホワイトらが創刊した『Aperture』誌にも参加。キルリアン写真（旧ソビエト連邦で発明された、被写体に高電圧をかけ、その放電を撮影した写真）に取り組み、植物などを被写体とした作品〈Metaflora Portfolio〉を『Aperture』（1979年冬号）誌上で発表した。
—
《パセリ》
1974年
ゼラチン・シルバー・プリント
315 × 232
星野崇氏蔵

12
ロール・アルバン＝ギヨー
Laure Albin-Guillot | 1879–1962
フランス生まれ。パリ16区のラネラーグ通り沿いの歴史ある中等教育学校のリセ・モリエールで学ぶ。1920年代から、ポートレイトやファッションなど主に商業写真の分野で成功を収める。洗練されたエレガントなスタイルを貫き、女性だけでなく男性のヌード写真にもその特性が発揮される。ソフト・フォーカス・レンズの使用や照明の工夫による鋭角な輪郭と柔らかな印象に加え、クローズアップや斬新な構図から、ピクトリアリズムとモダニズムの影響が見られる。
—
《（枝影越しの風景）》
1938年
ゼラチン・シルバー・プリント
453 × 410
—
《ヌード》
1938年
フレッソン印画
328 × 208
—
《（森の中の轍）》
1938年
カーボン印画
451 × 418

13
アンナ・アトキンス
Anna Atkins | 1799–1871
ヴィクトリア朝時代のイギリス生まれ。植物学者としての教育を受け、写真を科学的な目的のために使用した。植物標本を掲載する手段として、挿絵ではなく写真の使用を考案。従来の活版印刷ではなく、手書きの文章とサイアノタイプを用い、世界で初めて写真を科学的図版のための正確な媒体として確立させた。
—
《ギンシダ（ジャマイカ）》
1851–54年頃
サイアノタイプ
345 × 240

14
ジャロミール・ステファニー
Jaromir Stephany | 1930–2010
アメリカ生まれ。生涯にわたって音楽を愛し続け、それが写真制作の中心となる。ロチェスター工科大学でマイナー・ホワイトらのもとで写真を学び、実験的な写真を制作するようになる。1850–60年代に欧米で流行しバルビゾン派の画家たちに用いられた、クリシェ=ヴェールの技術を進化させる方法を模索し、革新的な宇宙のイメージを描きだした。
—
《019-03》
〈ダーク・スター〉より
2007年
インクジェット・プリント
760 × 507

15
杉村恒
Tsune Sugimura | 1926–91
奈良県生まれ。1949年、東京美術学校（現東京藝術大学）日本画科を卒業。翌年から在日アメリカ大使館に勤務し、アメリカ文化を紹介する仕事をおこなう傍ら、絵画の制作・発表も続ける。1953年頃に、「デモクラート美術家協会」に参加し、瑛九からフォトグラムの技術を習得する。絵画の素養を生かした写真作品は、斬新さと空想的な表現に満ちた世界を写しだしている。
—
《フォトグラム（女性と光跡B）》
1950–59年
ゼラチン・シルバー・プリント
244 × 168

16
瑛九
Ei-Q | 1911–60
宮崎県生まれ。日本美術学校洋画科に入学。1927年から美術雑誌に美術評論を発表。1930年、オリエンタル写真学校で写真を学ぶ。フォトグラムという写真技法を独自に命名した「フォト・デッサン」に取り組み、エッチングやリトグラフ、油彩も制作した。
—
〈フォト・デッサン〉より
1954–55年
ゼラチン・シルバー・プリント
275 × 215
—
〈フォト・デッサン〉より
1954–55年頃
ゼラチン・シルバー・プリント
303 × 253
—
〈フォト・デッサン〉より
1954–55年
ゼラチン・シルバー・プリント
269 × 218

17
マン・レイ
Man Ray | 1890–1976
アメリカ生まれ。ダダ運動とシュルレアリスム運動の両方で重要な役割を果たす。マルセル・デュシャンと出会い、芸術家グループ「ニューヨーク・ダダ」の主要人物として活動。パリに移住し、直感と偶然の効果による実験的な表現を追究した。カメラを使わない写真（フォトグラム）の制作を再解釈し、自分の名前と光線を意味するレイ（ray）をかけ合わせて、「レイヨグラフ」と名付ける。レイヨグラフやソラリゼーション（現像時に印画紙やネガフィルムに光を当てることで、写真の一部のネガ・ポジが反転する現象）などの暗室技法による作品制作を続けた。
—
《顔／ソラリゼーション》
1930年頃
ゼラチン・シルバー・プリント
350 × 308
—
《微風》
〈エレクトリシテ〉より
1931年
フォトグラビア印刷
260 × 202
—
《ランジェリー》
〈エレクトリシテ〉より
1931年
フォトグラビア印刷
260 × 205
—
《世界》
〈エレクトリシテ〉より
1931年
フォトグラビア印刷
260 × 205

18
ラースロー・モホイ＝ナジ
László Moholy-Nagy | 1895–1946
ハンガリー生まれ。色、質感、光、形の均衡など、純粋な視覚的基本要素からなる非具象芸術を提唱し、20世紀半ばの美術、応用美術の分野に多大な影響を与えた。1923年から28年まで、ドイツのワイマールに設立された総合的造形教育機関、バウハウスで教鞭をとる。絵画や写真、彫刻、映画、グラフィック・デザイン、舞台美術と活動は多岐にわたり、「光と運動による造形」という創作理念を確立。1937年に渡米し、シカゴにアメリカで初となるバウハウスのプログラムに基づいた教育機関、ニューバウハウス（44年にデザイン研究所、49年にイリノイ工科大学となる）を設立、数多くの優れた芸術家の育成に貢献した。
—
《無題》
1922年
ゼラチン・シルバー・プリント
181 × 127

19
クリスチャン・シャド
Christian Schad | 1894–1982
ドイツ生まれ。20世紀初頭のモダニストとして初めて、写真発明時から知られているフォトグラムを再発見する。カメラを使わないこの手法はトリスタン・ツァラによって「シャドグラフ」と命名され、前衛芸術家たちによって探究された。
—
《シャドグラフ 20》
1919年頃
ゼラチン・シルバー・プリント
136 × 103

20
杉浦邦恵
Kunié Sugiura | 1942–
愛知県生まれ。1963年にシカゴ美術館付属の美術研究所「シカゴ・アート・インスティテュート」に入学。実験的な手法による制作に取り組み、魚眼レンズによる画像の歪み効果の使用や、人物と風景のモンタージュ、モノクロとカラー・ネガの併用など、初期から制作のプロセスを重視した表現形式を模索する。1967年ニューヨークに拠点を移す。以降、写真の伝統や因習を破ろうとする試みを続け、伝統的なフォトグラムや写真と絵画を融合させる手法を独自の表現で展開する。
—
《孤 #L9-V1/3》
1966年
発色現像方式印画
336 × 264
—
《孤 56-V1》
1967年
発色現像方式印画
242 × 190
タカ・イシイギャラリー
—
《孤 56-V2》
1967年
発色現像方式印画
239 × 191
タカ・イシイギャラリー
—
《孤 56-V3》
1967年
発色現像方式印画
242 × 191
タカ・イシイギャラリー
—
《孤》
1967年
発色現像方式印画
343 × 232
タカ・イシイギャラリー

21
田口和奈
Kazuna Taguchi | 1979–
東京都生まれ。オーストリア、ウィーンで活動。自作のペインティングを被写体とした写真作品など、銀塩写真の特性を用いた表現を追究する。その被写体となるペインティングは、雑誌やファウンド・フォトなどの既存のイメージから、身体のパーツを選び出し、それらを組み合わせて精密に描きおこす。近年では、薬品を用いてモノクロ印画紙からカラーの発色を引きだしたり、印画紙から感光済みのハロゲン化銀を抜きとったりなど、被写体となる画像と結びついた支持体（素材）との関係を模索。また、人物構成の段階で、自作の彫刻とペインティングを多重露光して撮影するという方法も試みる。
—
《エウリュディケーの眼 #13》
2020年
ゼラチン・シルバー・プリント
147 × 105
作家蔵
—
《エウリュディケーの眼 #12》
2020年
ゼラチン・シルバー・プリント
147 × 105
作家蔵
—
《エウリュディケーの眼 #11》
2019年
ゼラチン・シルバー・プリント
147 × 105
作家蔵
—
《エウリュディケーの眼 #8》
2020年
ゼラチン・シルバー・プリント
147 × 105
作家蔵
—
《エウリュディケーの眼 #4》
2019年
ゼラチン・シルバー・プリント
147 × 105
作家蔵
—
《エウリュディケーの眼 #16》
2020年
ゼラチン・シルバー・プリント
147 × 105
作家蔵
—
《エウリュディケーの眼 #19》
2020年
ゼラチン・シルバー・プリント
147 × 105
作家蔵
—
《エウリュディケーの眼 #18》
2020年
ゼラチン・シルバー・プリント
147 × 105
作家蔵
—
《エウリュディケーの眼 #2》
2019年
ゼラチン・シルバー・プリント
147 × 105
作家蔵

22
佐藤時啓
Tokihiro Sato | 1957–
山形県生まれ。光と空間、時間を表現するために発光体を使った立体的な空間構成に早くから関心を向ける。彫刻作品やインスタレーションを試作した後、写真に取り組む。ペンライトと鏡を使い、長時間露光によってフィルムに光と作家自身の動きの軌跡を定着する独自の作品で注目される。本展出品の〈Polaroid Works〉はポラロイド社製4×5インチのインスタントフィルム、Polaroid Type 59によって、ローマやユカタン、アイントホーフェンなどで撮影。〈光–呼吸〉のヴァリエーションともいえる本作は、独特の色味と小さいサイズを生かした魅力あるシリーズである。
—
《Pantheon (Roma)》
〈Polaroid Works〉より
1995年
拡散転写方式印画
113 × 88
—
《Eindhoven #1》
〈Polaroid Works〉より
1995年
拡散転写方式印画
88 × 113
—
《Eindhoven #2》
〈Polaroid Works〉より
1995年
拡散転写方式印画
88 × 113
—
《Eindhoven #3》
〈Polaroid Works〉より
1995年
拡散転写方式印画
88 × 113
—
佐藤時啓
《Eindhoven #5》
〈Polaroid Works〉より
1995年
拡散転写方式印画
88 × 113
—
《Monte Alban #2 (Yucatan)》
〈Polaroid Works〉より
1995年
拡散転写方式印画
88 × 113
—
《Uxmal #3 (Yucatan)》
〈Polaroid Works〉より
1995年
拡散転写方式印画
88 × 113
—
《Lagoon #2 (Yucatan)》
〈Polaroid Works〉より
1995年
拡散転写方式印画
88 × 113

23
スーザン・ダージェス
Susan Derges | 1955–
イギリス生まれ。ロンドンのチェルシー・スクール・オブ・アートとスレード美術学校で絵画を学ぶ。1980年から86年まで日本に滞在し、帰国してからは日本のミニマリズムの影響を受けながら、カメラを使わない